

# Computer Report

Vol. 52 No. 10 10月号 (通巻 697号)

## はじめの言葉

■「今回の不況は年寄りの病気のように良くなったり悪くなったりではっきりしない」と表現した知人がいる。高齢化社会にある今、表現上の上げ足取りの存在を気にすると適切な言い方かどうかは分からないが、言い得て妙である。近隣周辺との妙な緊張感が出ている中、国の抱える病もまた然りである。先延ばしにしてきた問題材料が、一気に吹き出してきたようでもあるし、ちょっとした油断から寝た子を起こしてしまったのかもしれない。

■政界を代表する与野党の党首／総裁が新しく決まり、良くなる兆しを期待しながらも、何とも前途には不安満杯である。頼れる政権が現れるような気がまったくしない。経済不況に政治が特効薬になるとも思えないし、因果関係すらはっきりしないのが現実だ。歴史上有名な 1930 年代の世界恐慌も、アメリカのニューディール政策が効を奏したと社会科の教科書には書かれていたが、本当のところは定かではない。

■1945 年に第二次世界大戦は終わった。その時期に、原子力、コンピュータ、高分子化学の三大発明があった。蒸気機関ひとつで世界中に産業革命が起こったが、それに匹敵するものが 3 つも発明され、実用化された。とは言え、兵器としての原子力活用はともかく、平和利用としての原子力は、人類の制御できるレベルにはまだ達していない。コンピュータも然りである。セキュリティ問題など、様々な矛盾、不適切さが表面化してきている。

■石油、石炭から様々なエネルギー、素材を取り出す高分子化学の分野についても、まだまだ課題が多い。その最終製品の製造過程で排出される公害問題は、その生産技術とともに先進国から発展途上国にそのまま持ち出され、場所を変えて表面化している。全地球規模で考えれば、何ら最終的な問題解決をするに至っていない。人間の欲望という発明の母によって産み出された三大発明だが、人間がそれらを使いこなせるまでに至っていない。

■ただ皮肉なことは、こうした科学技術分野での発明／進歩の契機／背景には、戦争という暗い人類史があったことである。これら三大発明が 1945 年前後に集中していたのも、単なる偶然ではないだろう。奇しくも、周辺隣国との緊張度合いは予断を許さない状況の最中、与野党のトップがともにタカ派だとマスコミが無責任に囃し立てれば、それに呼応するように、二人の党首は威勢を張って見せている。まるで子供のようだ。

■中国大陸（上海）に赴任している人の帯同婦人が一時帰国した。進出企業の指示だそうだが、最短でも 10 月の国慶節が終わるまでは日本で待機せよとの判断だという。日本で報じられるテレビ画像だと今にも滞在邦人の身に危険が迫っているかのようだが、聞くとところによると、一般の中国の人々もかなり冷静のようだ。中国政府のスポークスマンだけの威勢のよさが目立つが、タカ派党首の見せる威勢とどっこいどっこいのようだ。

■ちなみに日本企業が恐れているのは、中国人による邦人への危害よりも、中国政府への政治的憤懣、経済的格差からくる国民の不満が爆発することで、政府の統治機能が失われ、日本への自由な出国などが不能になる事態だという。政府レベルでのやり取りではなく、その前に彼我の国民レベルの交流、親好がさらに進展することを切に望むばかりだ。先月も書いたが、安っぽいナショナリズムの持ち出しは、相互の国にとって益がない。（藤見）